

「とある植物のある生活」 Plant Life by Trevor Baxendale

グエンはハブの扉がゆっくり開くと軽やかにスキップしながら入ってきた。彼女は滅多にこんなことはしない。いつもは心配事がいっぱいだから・・・夜中にエイリアンが侵攻しようとしているとか、時空間の裂け目から異次元の攻撃らしきものがあったとかいう携帯メールが入る、・・・そんなときにトーチウッドの地下基地に足を踏み入れることは、すなわち死に一步近づくことを意味する。

でも、今日は違う。今日は違う日だ。今日は何もない。本当に何もない普通の日。普通であることが普通である日。

「ひさしぶり。」キャプテン・ジャックは叫んだ。

グエンは微笑みながら彼のオフィスに小走りで入っていった。

彼は机の上に足を乗せ、その目が輝き、顔じゅうにこぼれ落ちそうなほど笑みをたたえていた。「今日はよく来てくれた、ウィリアムズくん。」彼は続けた。「仕事の予定は何かもう考えているかな。恋に侵された目で、中をさまよってみるだけでもよし。お好きなように。就業規則では、ハネムーン代わりにそうしてもいいことになっている。」

「クーパーよ。」グエンはにっこりしていった。「旧姓を使うことにしたから。リースも賛成してくれたし。」

「彼が賛成したって？」

「そうよ。あたしがグエン・クーパーでなくなったら、いったいあたしは誰って。」グエンは左手を上げ、指をひらひらさせた。「これで結婚してるってわかるし。」

「で、こっちは何の意味だ？」ジャックは彼女の左腕にぶらさがったものを指さした。

彼女は少し驚いたように、それを見下ろした。「これ？関係ないものよ。植物だもん。」

「植物。」

「そう。スパイダープラント [オリヅルラン] よ。フラットに置こうと思って。今朝、ここへ来る途中にマーケットで見つけたの。どう思う？」

彼女はひょろりと伸びた小さな植物をジャックに見えるよう差し出して見せた。彼は体をまっすぐにし、映画俳優のような端正な顔に少し嫌悪感を浮かべた。「クモ [スパイダー] には興味ないんでね。」

グエンは彼に付いてオフィスを出、トシのデスクの方へ向いながら、笑った。トシコは熱心にワークステーションに繋がった何台ものディスプレイ見ていた。

「おはよう、グエン。」彼女は目を上げもせずに行った。モニターの内容が、彼女のメガネにも映っていた。「新婚生活はどう？」

「最高。」グエンは、イスに座っているトシの周りを上機嫌に回りながらいった。彼女はジャックの後ろを、スキップしながらついていった。「あなたがクモを怖がるなんて、知らなかった。」

「別に怖くはない。興味ないといっただけだ。ジェイナス・プライムで落下するはめに

なったことがある。クモとおれと一緒に。」

「まあ、これはただの植物だし、ただそれだけってこと。心配ないし。」グエンは鉢植えの植物を無造作に自分の机の上に置き、イスにどさりと座った。

ジャックは顔をしかめた。「新婚の天国気分を早くどこかへ置いてきて欲しいものだ。おれからリースにしておく必要があるな。早く汚い靴下を床にまき散らして、ベッドで爪を切るようにって。」

「あら、彼、もうとっくにやってる。」グエンはため息をついた。「だからいってるでしょ、心配ないって。」

「ムカついてきた。」

「コーヒーが欲しいな。」グエンは自分のコンピューターを軽くたたいた。「イアントはどこ？マンデイ・モーニング・スペシャルが欲しい。」

「お茶くみのにいちゃんは、温室にいるよ。」オーエンが地下の検死室から昇ってきながらいった。

「その呼び方は止めなさい。」グエンはたしなめた。「で、彼、そこで何してるの？」

「植物に水をやる当番ですから。」イアントは説明した。注意深くプラスチック・カップから植木鉢の砂に水を注ぐその顔には気遣いと集中力があふれていた。イアント・ジョーンズは、どんな仕事でも同じレベルの正確さと献身さで遂行するのだった。それがコーヒーを入れることであっても、ウィーヴィルに向かってスタンガンを構えるときであっても。

温室はチームにとってくつろぎの場所だ。非常に活発な環境のハブの中にある小さな静寂の地だった。温かく隔離された突き出た鋭角のガラスに囲まれたスペースで、基地の他の部分を見下ろす位置にあった。

グエンはジャックの姿から目を離すと、植物越しにピンストライプ・スーツのイアントをちらっと見た。「これはオーエンの仕事だと思ってたけど？」

「ええ、いまは別のことに気を取られている様子なので。」イアントは返答した。「死んだりあれこれありますから。」彼は背筋を伸ばすと、優秀な人間があら捜しするように手仕事の出来を注意深く見まわした。「それに、ハブの中であれば、**わたしの**仕事です。」

グエンは植物棚に沿って歩き、植物の葉を指でもてあそんだ。「ここの植物は、すべて地球外のものなんでしょ？」

イアントは肩をすくめた。「いくつかはそうです。時空間の裂け目から流れてきた孢子や種がもとです。それを植えて、育つかどうか試してます。たいていは死んでしまいますね。この宇宙には光合成しない植物や二酸化炭素が毒になる植物もあります。特別に制御した環境を必要とする植物も、」彼は大きな青いガラスのボトルをとんとんと軽くたたいた。「紫外線を必要とするものもあります。光を完全に遮断しないと育たないものもあります。」彼は大きな黒い箱のふたをロックした。その箱は完全に封印されていて中が見えなかった。

「この中で何かが育っています。伝えられるところではね。」

「あなたにはわかるの？」

「わかりません。わたしはシュレディンガーの植物と呼んでいます。」

グエンはベンチ横の泥炭に植わった小さな紫の花を見ようと身をかがめた。「これは何ていう花？とってもきれい。」

「ノーズ・バイター [鼻食い] です。」イアントはさらっといった。「肉食植物です。」

グエンはぎざぎざのある花びらがびくびく動いたので身を引いた。

「必ずしもすべての植物の起源が地球外というわけではありません。」イアントはまるでツアーガイドのように続けた。「いくつかは未来や過去から時空間の裂け目を通して来たものです。これはシルル紀のもので。」彼は大きなふさふさしたシダを指し示した。

グエンは明らかに感銘を受けたような風を装ったが、さっぱりわからなかった。彼女が入って来たときにイアントが注意深く水をやっていた標本をのぞきこんだ。「これは何？」

「あ、これはわたしのお気に入りです。」

平たい植物だった。薄い緑の茎と何の特徴も無い一枚の葉があるだけだった。「やっぱりいー。」グエンはいった。

「数日前に葉が出たばかりです。」イアントは説明した。「実際、先週は死んでいました。オーエンは捨ててしまおうとしましたが、みんなにチャンスを与えるべきと思ったので。」

「みんな？」

「ものです。すべてのものにです。」

グエンは背筋を伸ばした。退屈していた。「すばらしい。」

「必要なのは水だけでしたよ。それから辛抱が少しだけ。」

「素敵、」グエンはイアントに満面の笑みを見せた。「で、今朝はコーヒーの脅威でもあったわけ？」

オーエンはもう眠ることがなかったので、大半の時間をハブでぶらついて過ごしていた。キャプテン・ジャックはすべての時間をハブで過ごしていた。実際のところ、彼の睡眠区画はオフィスの下にあり、床にはめ込まれているサルベージしてきた潜水艦のハッチが出入り口になっていた。こんな生活、常軌を逸しているとオーエンは思っていたが、いまやトーチウッドの外に生活の場が無い気持ちが理解できるのだった。生活の場がまったくないなんて、ジ・エンドだ。

どれほど早い時間にオーエンが出勤しても、ジャックはすでに起きていて、彼が来る前にシャワーを浴び、着替え終え、満面に笑みをたたえながら迎えてくれるのだった。「おはよう！」オーエンが独房からぶらぶらと上がってくると、ジャックがオフィスから声をかけた。オーエンはウィーヴィルを閉じ込めている錠を念のために検査していたのだった。彼はジャックに手を振り、ジャックは**タイムズ**を生意気にぴしっとはじいて合図を返した。

彼らの上、アーチ形天井の周辺を翼竜がけだるげに飛んでいた。

「ジャック！オーエン！」イアントの声が上の方から響いてきた。オーエンは驚いた様子で、温室に続く螺旋階段の上に立つイアントを見上げた。イアントはワイシャツ姿だったが、ベストとネクタイはしていた。どうしてこんな朝早くからイアントにしてはカジュアルな格好をしているのだろう。

「ヘイ、イアント、」ジャックは叫んだ。「どうした？」

「新しい芽です！芽が出ました！」彼は叫ぶと、矢のようにすばやく温室に戻った。

オーエンとジャックがのぞくと、彼は熱心に植物を・・・自他共に認めるイアントの植物を・・・見詰め、指さした。「見て下さい！ここです。新しい芽です。素晴らしいじゃないですか。」

二人は植物を調べた。確かに葉のわきに小さな輝く緑のふくらみがあった。

「いったいどこから来た植物だろう。」ジャックは静かに思いを巡らせた。「いったいどれほどの距離、宇宙を旅し、ここへたどりつくまでにどれほど長い時を生き延びてきたのだろう。」

「よくやったな。」オーエンはしぶしぶ認めた。「おれはほとんどあきらめていたのに。」

「**完全に**あきらめてましたよ。」イアントはいった。

「いくつか試験をさせてもらうとするか。」オーエンはそれとなくいった。「結果とアーカイヴの記録で細胞のパターンを照合する。そうすれば何かわかるかも。」

「そんなことでいまの時間を無駄にする必要はないと思います。」イアントはいった。「こいつはここにいますし、生きてますから。今でなくても問題にはならないでしょう？」

「何かありそうな気がする。」オーエンは主張した。

ジャックはいった。「とにかく、まずアーカイヴに性質の一致する記録があるかどうか照合したらどうだ。イアントが手伝う。平穏な一日になりそうだからな。トシは出かけているし、おれはUNITと一緒に片づけ事をしなければならないから。」

しかし、イアントは聞いていなかった。植木鉢の彼の植物の根元に優しく水を注ぎ、水が土にしみていく様子を眺めていた。

オーエンは肩をすくめ、出口に向かった。「終わったらすぐに来てくれよ。」彼はため息をついた。

「この植物もコーヒー好きだと思う？」グエンはたずねた。

イアントは首を振った。「だめでしょう。不純物だらけですから。いまのところ水だけで十分です。」

「いまのところ？」

「それから愛情と理解とですわね。」イアントは微笑んで付け加えた。

グエンは優しく笑った。「あなたって、園芸の達人ね。」

「やあ、いたな。」ジャックがぶらぶらと温室に入って来た。「おまえはここだろうと思った。イアントの植物がどうなったかみんな知りたがっている。」

「また次の葉が出てきました。」イアントは得意そうにいった。

「トーチウッドでは退屈する暇がないな。」ジャックはいった。

「なんとなくかわいいと思わない？」グエンは微笑んだ。

「状況によるぞ。」ジャックは答えた。「イアントの通常の仕事がいいつにどれくらい食われているか。例えばコーヒーとか。」

「いいこという。」グエンはうなずいた。

「すぐにコーヒーを持っていきますから。」イアントは二人に請け合った。声のトーンがいつになくぶっきらぼうだったので、グエンとジャックはお互い浮かぬ顔をした。

「あたし、仕事に戻る。」グエンはドアに向かいながらつぶやいた。

「ああ、」ジャックはいった。「おれもだ。」

「ねえ、もう名前はつけたの？」トシコは夜帰るためにワークステーションの電源を落とす操作をしながらいった。

イアントは首を振った。「ニックネームはまだです。」

「何かないと変な気がする。」トシは穏やかに主張した。「名前を付けるべきだと思う。」

「オーエンが植物のアーカイヴで一致する情報の有無を確認しています。」イアントはあくびをしながらいった。「情報が見つければ、何だかわかるでしょう。」

「ずいぶん疲れてるじゃない。」

イアントは伸びをし、古いソファにもたれかかった。「少し寝た方がよさそうです。本当に。」

「ずっとここにいるでしょ。」トシはいった。「いまは何も異常がないのに。くたくたじゃない。疲れたまま仕事したってジャックはありがたいがらない。いまは静かかもしれないけど、ここはどういうところかわかってるでしょ。いつ何時何が起こるかわからない。みんな備えておかないと。」

イアントは両手で顔をこすった。「わかってます。わかってますよ。すぐ家に帰ります。もう一度植物の様子を見たあとで。」彼は自分の体を引きずるようにして立ち上がり、温室に向かった。

トシは考え深そうにメガネのつるを噛みながら、階段を昇るイアントを眺めた。

「でも、危険はないように思える。」次の日グエンはいった。彼らは会議室に集まっていた。ジャックは考え事をしながら鉛筆をもて遊び、グエンはテーブルに座り、トシはその隣に、オーエンは両開きのドアに寄り掛かっていた。

「君はこれがただの趣味だと思うのか？」ジャックは感心する様子も無くいった。

「あまり趣味にはくわしくないから。」

「趣味ってのは男がするものだよ。」オーエンがコメントした。

「イアントは何も趣味を持ってない。」ジャックはいった。

「ストップウォッチにはご執心よね。」グエンはいった。その目は天真爛漫そのものだった。

「あれは趣味とはいえん。」ジャックは主張した。

「ただの植物よ。」トシコは思い切っていった。「どんな危険があるっていうの？」

「彼はあいつに取りつかれている。」ジャックはいった。冷淡な声になった。

「あの植物に毒はない、食肉性でもない、可動性もなく、知性もない。」トシコは続けた。

「あれはどの点から見ても、ただの植物にすぎない。繰り返しますが、どんな危険があるっていうのですか？」

ジャックは急にオーエンのほうへ向きを変えた。「データベースで何か見つかったか？」

「何にも。トーチウッドの植物記録を過去百年分以上さかのぼっても何も無かった。コンピューターにも、マイクロフィッシュにも、文献にも、日記にも性質が一致するものはなかった。あれが何かわからない。まったく何かわからない。」彼は意味ありげに付け加えた。「エイリアンかどうかだね。」

「どういう意味？」グエンはたずねた。「温室にある植物はすべて地球外の起源か、別の時間軸のものだと思ってたけど。」

「われわれはそう思ってる。」オーエンは答えた。「今回のケースに関して、証拠はどこにある？ぼくが指摘したいのは、地球の植物にも性質の一致するものはないってことだ。三日間探ただけだが、馬鹿にならない仕事量だぞ。」

「細胞のサンプルを採りましょ。」トシコはいった。「顕微鏡で調べるの。」

「はっきりいうが、まだやってなかったとは驚きだ。」ジャックが割って入った。

軽くであっても叱責に不慣れなトシコは、一瞬怖さでぐっと詰まったような様子を見せた。ジャックは優しい口調だったが、表情に微笑みはなかった。「わたし・・・わたし、必要だとは思わなかったの。」彼女はいった。「他の事で忙しくしていたから。問題になっているとは気づかなくて。イアントが植物の面倒を見ている。ただそれだけだ。」

「彼女のいうとおりよ、ジャック。」グエンは彼女に賛成した。

ジャックはため息をつく、鉛筆をテーブルの上に放り投げて、ミーティングは終わりだという合図をした。「オーケー。みんな、仕事に戻るぞ。おれは歳のせいで偏執狂になっちゃったらしい。とっとといくんだ。」

みんなぞろぞろと出ていったが、彼はグエンが出ていく前に呼び止めた。「リースはオリヅルランを気に入ってくれたのか？」彼はたずねた。

彼女は笑った。「気がついてもくれないの。」

植物は元気そうだった。高さはさらに二センチほど伸び、しゃきっとして、葉は二枚になり、さらに新しい葉が出かけていた。さほど大きくは無いが、とても変わった見栄えで、いまや温室を占領していた。

実は大きさを占領しているのではなく、他のほとんどの植物が外に出されてしまったのだった。

イアントは他の植物を次々と温室の外へ移動させてしまった。出された植物が螺旋階段のステップをふさいでしまい、トシコは温室のドアに近づくためとても注意して植物の葉の間をかき分けていかなければならなかった。中に残っている他の植物は、フロアの奥側に移され、イアントの小さな植物から離されていた。棚の中は大半が空になっていた。

「イアント・・・いったいどうなってるの？」

「なんでもありません。」誰かが名前を知っているかもしれない植物が入った重たいガラスの釣り鐘型ジャーをドアの脇に置いたあと、イアントは、背筋を伸ばして、不平っぽくいった。「空間を広くしようとしているだけです。」

「何のために？」

「植物のためです。混み合ってきましたから。光と空間が十分でないとうまくないでしょう。」

いまやがらんとした温室にトシコは足を踏み入れた。彼女の声はガラスの壁で反射して少しエコーがかかった。「オーエンはこのこと知ってるの？」

「オーエン？」イアントは言葉を繰り返した。「何の関係があるというのですか？」

「なんというか・・・ここを管理してるでしょ？」

「オーエンはいま別のことに気を取られてます。前にも指摘したでしょう。」

「あなた、どうしたの？」

「わたしがどうしたっていうのです？」

「ジャックはあなたが植物に取りつかれているとってる。」トシコは注意深くいった。イアントは微笑んだ。「嫉妬してるだけです。」

「たぶんね。それにしても、あなたはこれに力を注ぎこみ過ぎてる。ただの植物でしかないのに。」

「ジャックも余計な心配をしすぎだ。あなたもだ。あなたの欠点ですよ、トシ。いつも心配しすぎだ。ときには必要なものだけを受け止めて、他を全部無視すればいい。」

トシコは少し引いてしまった。イアントがこんな口のきき方をするのは初めてだった。脅し口調ではないが、なんだか変だった。彼女は深呼吸してからいった。「調査のためにサンプルを採りたいと思ってきたの。」

彼女の方を見ると、顕微鏡用のスライドを持っていた。

「だめです。」彼はいった。

「ほんの少しだけ。」トシコはいった。「細胞の構造を見たいだけだから。」

「だめです。」イアントは繰り返した。

彼は単調にいい、微笑みを浮かべたので、トシコは一瞬たりと疑わなかった。「わかった。」彼女は態度を和らげた。「でも、このことはジャックに報告する。明確な指示を受けているから。その植物はカタログ登録しなければならないし、そのときには細胞サンプルを必ず登録しなければならないってことははっきりしてるのよ。」

彼女は空のスライドを持って温室を出ていった。一方イアントは植物の根元にさらに水を注意深くかけてやった。

「へい、」戸口からジャックが声をかけた。「休憩しないか？」

「結構です。ここで十分です。」

「何だかおかしいぞ。」ジャックはハブを見下ろすガラスに寄り掛かっていった。彼はマグカップからコーヒーをすすった。「おれがいたいのは、そうやって座って。何にもしてないだろ。」

「何もしてないわけではありません。」イアントははっきりいった。ジャックのほうを見ようとしなかった。彼の注意は植物だけに注がれていた。いまや温室の中にあるのはその植物とその正面に置かれたイアントが座る回転イスだけだった。

「わかった。」ジャックはゆっくりうなずいた。「おれが見落としたりしい。」

「そう、」イアントは同意した。「あなたは見落としているようです。」

「みんなおまえのことを心配している。」

「心配することなんて何もありません。ぼくらは大丈夫です。」

「ぼくら？」

「**ぼく**は大丈夫です。ぼくは**大丈夫**なんですって。」イアントはジャックを見上げた。「本当に。」

「オーケー。」ジャックはいった。彼はもう一口コーヒーをすすると、しかめっ面をした。「状況をいうと、いまのところおれたちは不味いコーヒーを飲む羽目になっている。ひどい味だ。まるでソニター下痢みたいに。信じてくれ、おまえなら二度とこんなものを口にしないほどの代物だぞ。」

「人生にはコーヒーよりも大切なことがあります。」

「それは何だ？」

「ぼくの良いところはそれだけだと思っているでしょう、ジャック？コーヒーを入れることだけだ。」

ジャックはにやりと笑った。「そうだなあ、他にもおまえのどの部分がいいのか二つは思いつくぞ。」

「そういう意味ではありません。わかってるでしょう。」

ジャックは無頓着にポケットに手を入れ、部屋の中に入って来た。「イアント、やりすぎ

だ。休憩しろ。この二日間、おまえは一睡もしてないだろ。ひげも剃ってない。おれが無精ひげをどう思ってるか知ってるだろ。」

「剃刀を持ってきてくだされば剃りますよ。」

「そうか。着替えはどうするつもりだ？なぜならはっきりいうが、いつもの心地よい香りはしてないからな。」

「ぼくはここを離れません。ここの仕事が最優先ですから。」

「十分間でも出る。トイレ休憩は？」

「必要ありません。過去二十四時間、水を飲んでません。」

ジャックのブーツの下で、何か踏み砕ける音がした。イアントのイスの後ろに散らばる小さな割れたガラスの破片の反射がジャックの目に止まった。彼は注意深く破片をまたぎ越すと、イスの背もたれに寄り掛かった。イスが少し傾いたが、イアントはぴくりとも動かなかった。ジャックは深呼吸をした。「おまえ、これは少し・・・異常だと思わないのか？」返事がなかったので、ジャックは静かに話しかけながら、イスの脇に座った。「イアント・・・植物の細胞サンプルが必要だ。こいつがどう生きてるのか調べなければならない。つまり、われわれにはこいつがどうやって生きているのかわからない。こいつが何なのか何をしているのか見つけ出したい。」

「これは成長しています。植物です。他に何だというのです？」

「さあ、それがわからん。だから調査したい。」ジャックは長方形の薄いガラス板を取り出してみせた。「スライドを持って来た。サンプルを取らせてくれ。そうしたら、おれは出て行って、おまえと植物だけにしてやる。それでいいだろ？」

返事はない。

「トシコが装置を準備して待っている。あとはサンプルだけだ。いいだろ？」

それでも返事はない。

ジャックは植物に近寄り、顕微鏡スライドを手に植物に手を伸ばした。イアントがジャックの手首をつかんだ。ガラガラ蛇並みの素早さだった。彼のこぶしは白くなっていたが、両目は赤く血走って、大きく見開かれ、警告を発していた。

「触るんじゃない。」彼は非難めかしてささやいた。「触るなんて許さない。」

ジャックは振りほどこうとしたが、イアントは驚くほど強くつかんで押さえ込んだ。ジャックが腕をもぎ放すまで、ふたりはしばらくお互いに取り組みあった。「勘弁してくれ、イアント。植物ごときでおまえとケンカなんかしたくない。」

「なら、おれにケンカを売るな！」イアントは怒って叫んだ。「ひとりにしてくれれば、すべて丸く納まる。わからないのか？」

ジャックは立ち上がると、荒い息をついた。「おまえ、腕をどうした？」

「何？」イアントは自分の腕を見下ろした。そでがめくりあげられていて、白い肌に絆創膏がいくつも並べて貼られているのが見えた。「何でもありません。ただの事故です。それだけです。標本やジャーを移動させている時、ひとつ割りました。そのとき腕を切りま

した。何でもありません。」

ジャックは床のガラスの破片をちらっと見降ろした。「おまえ、もっと気をつけろよ。」

「あとで掃除しますから。」

「おれがいつてるのはガラスのことじゃない。」

ジャックはスライドを床に投げ捨て、歩み去った。

ハブには自然光が無い。トーチウッドの基地は地下深くにあり、窓が無い。ときどき日中と夜の区別がつかなくなり、時間感覚が簡単に失われてしまう。それを緩和するためと、生物時計のあいまいさを維持するための有効な方法として、ジャックは夜になると灯りを落とし、朝には点けることにしている。イアントは一度それを潜水艦の生活になぞらえたことがある。ジャックはウインクして、第二次世界大戦中、ドイツ軍のUボートで数週間過ごしたことがあると彼に話した。「厳密にはおれは戦争捕虜だったわけだが、長い間潜水していると、まあ、そうだな、水夫は世界中どこにいても水夫だから。」

ここへ来たばかりのころのイアントはすぐに赤面したものだ。「彼らは潜水艦乗組員です。」彼はつぶやいた。「水夫ではありません。」

ジャックは思い出に微笑んだ。イアントにはいつもわずかだが杓子定規なところがある。その表向きの穏やかさの下には鋼の強さがある。それを知る者はほんのわずかだ。本当に残念なことだ。

「彼はきっと大丈夫。」オフィスからハブを見渡せる丸窓の側にいるジャックにグエンが寄ってきて静かにいった。もう夜中でどこも薄暗かった。オフィスの反対側の温室には灯りが点り、そこに座って植物を見つめているイアントの姿が見えていた。「あたしたちできっと方法を見つけだせる。」

「そうだな。やろうと思えば、みなでなだれ込んで彼を引きずりだすのも手だ。」ジャックはため息をついた。「オーエンはそうしたがっている。」

「いったいつからオーエンのしたがつていることに耳を貸すようになったの？」

「必ずよりよい方法があるはずだ。グエン。おれは彼を傷つけない。」

「彼だっていつかは眠ってしまうはず。必ず。立てこもりのとき、警察はそうする。充分に待って、相手がうっかり・・・居眠むったらね。」

「イアントは無理だな。見かけ以上にタフだから。あの植物は完全に彼を支配している。どうやったのかはわからんが、おれがその支配から必ず解き放ってみせる。グエン。断言する。」

「彼が動いてる。」グエンは突然いった。

オフィスからはイアントの姿が小さな影に見えるが、彼はイスから立ち上がった。

二人はオフィスから走り出て、ジャックは下層レベルへの階段へ飛ぶように駆けていき、一方グエンは彼の後ろをカタカタと音を立てながら急いだ。やっと彼女は彼の腕を捕まえ、

引っぱって止めた。「待つて！」彼女はシーッと合図した。「あわてないで。彼に聞かれてしまう。」

オーエンが独房から上がってきて、ジャックとグエンの方を見、次いで温室を見上げた。彼はすぐに何かが起こっていることを察知し、グエンに問いかけの視線を投げた。

彼女は指を唇にあて、警告の合図をした。

ジャックはすでに螺旋階段をまるでジャングルキャットのようにすばやく音も立てず登りはじめていた。グエンもなるべくジャックに合わせてるように登った。反射的に尻ポケットから銃を出そうとしたが、そのときになって机の上に置いてきてしまったことを思い出した。オーエンの後ろをちらっと見ると、トシがPDAを取るため一瞬立ち止まったあとに同じくこちらに向かって来るのが見えた。

温室でイアントは植物の上に前かがみになっていた。そでを肘の上までまくりあげ、前腕を伸ばしていた。絆創膏は剥がされていた。皮膚に深い傷が数か所あり、白い肌に血がくっきりと赤くにじみ出て、手首の方へ流れていった。血がより多く流れ出るように、拳は固く握りしめられ、血がぼたぼたと植木鉢の土の上へ滴った。

ジャックは戸口に立ち、その光景に立ちすくんだ。まるでとてつもなく個人的な宗教団体の儀式に割り込んでしまったような気分になった。イアントは気にも留めず、植物に集中していた。ジャックが眺める中、植物の葉柄部から薄く長い鼻のようなものが現れて、ハチドリの舌のようにイアントの腕へと伸びていった。そいつは傷を漁り、血をぴちゃぴちやとすすりながらかすかに脈打った。

「この野郎！」ジャックにはもう十分だった。彼は罵詈雑言を自分自身に向かってわめきながら部屋を横切り、イアントを植物から引き離した。血が吹き出して宙に散り、イアントはきりきり舞いして、待ち受けるオーエンとグエンの腕の中へ崩れるように倒れこんだ。二人は彼をゆっくりと床に寝かせた。

植物がしゅーっと音を立てた。

ジャックは向こうの壁に植木鉢が当たる様に力いっぱい柵から払いのけた。植木鉢は泥のシャワーとなってガラスに当り、飛び散った。植物は床に落ち、白い根が空中で身もたえする様子は、まるで百本の指が散った土を求めてまさぐっているようだった。ジャックはすばやく大きく二歩でそいつが落ちている場所へいった。そして、ブーツを履いた足を振り上げると植物を踏みつけ、緑と赤の床のしみになるまで踵で踏みねじった。

イアントの体が即座に弛緩した。グエンが起こそうとすると、頭がだらりとたれた。オーエンは腕に応急手当を施していた。「オーケー、イアント、もう大丈夫だ。助け出したからな。すぐよくなる・・・」

トシコは植物の残骸をPDAでスキャンした。「生命反応ありません。」彼女は報告した。「これが何であつたにせよ、死んでます。天寿を全うすることなく。」

ジャックはうんざりして口をゆがめた。「いったいこいつは何だ？」

「植物です。」オーエンはいった。「ある種のテレパシーを出す種で、たぶん、身を守るために周囲の動物の精神をコントロールするのでしょう。こいつはイアントに世話をさせ、保護も、えさやりもさせた。イアントは奴隷以外の何物でもなかった。」

「ところで、彼はもう大丈夫。」グエンは請け合った。「あなたがあいつを殺した瞬間、彼の力が抜けたのを感じた。まるで糸を切られた操り人形みたいに。あいつの支配から解放された。」

ジャックは出ていこうと方向を変えた。「ここを除染しておいてくれ。イアントもだ。この部屋は汚染されている。」

グエンはジャックの腕に手をかけた。「自分を責めないで。何が最適な判断か誰にもわからない。」

「植物の意思是別か？」

「もう死んでしまった。あたしたちも無事。イアントも無事よ。」

「もしわれわれが警戒を怠ったとしたら？種ができれば、それが飛び散ったら、ハブの外に出てしまったら？地球全体にこいつが広がって、公園や生け垣に生えてきたらどうなると思う？人間は魂のない奴隷となって、何もせず、ただ吸血植物に餌を与えるだけの存在になってしまうんだぞ。」彼は肩をすくめ、仲間を振りかえった。「これがおれたちの仕事だ。これがトーチウッドだ。おれたちへのんびりする余裕はない。ためらっては行かない。備えなくてはならないのだ。」

Notice 2009/06/20

このドキュメントは、Kubo Sachie が個人の楽しみとして作成したものです。

元の著作物の著作権を侵害する意図はありません。

また、日本語作成時の誤訳・文章脱落等は十二分にあります。訳の正確さを保証するものではありません。英語ではなく、日本語で読んで楽しんでもらえたら、と思います。

なお、物語の中の出来事、人物はすべて架空であり、現実との類似は偶然です。(あったら怖いかも・・・)

参考：使用した原文の出典

TORCHWOOD THE OFFICIAL MAGAGINE YEARBOOK

Published by Titan Books

First edition August 2008

'Plant Life' by Trevor Baxendale

ISBN-13: 978-1845769369

Torchwood: Plant Life